

2013年「看護の日・看護週間」



第3回 「忘れられない看護 エピソード」集

あの時の看護があったから…。



公益社団法人日本看護協会



看護の心をみんなの心に

5月12日は
看護の日

www.nurse.or.jp

【主催】厚生労働省／日本看護協会

【後援】文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会

【協賛】日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会
日本助産師会／日本精神科看護技術協会／日本訪問看護財団
テルモ(株)／東洋羽毛工業(株)／パラマウントベッドホールディングス(株)／
(株)ソシエ・ワールド／ナガイレーベン(株)／ワタキューセイモア(株)

あの時の看護があったから…。

はじめに

5月12日は「看護の日」です。
近代看護を築いたナイチンゲールの誕生日にちなみ
1990年に制定されました。それ以来「看護の心をみ
んなの心に」をメインテーマに厚生労働省と日本看護協会
の主催で、毎年さまざまな事業を全国各地で行っています。
2013年度は、第3回「忘れられない看護エピソード」を
看護職と一般の皆さまから募集。3419通の応募の中か
ら、特別審査員の内館牧子さん（脚本家）、ゲスト審査員の
若尾文子さん（女優）らによる、よりすぐりのエピソードを
20作品、ここに収録しました。

ケガや病気で入院したり、ご家族に付き添ったり。
患者さんやご家族にとっても、看護にあたる看護師にとつて
も、心に残り、ずっと人生を支えてくれるような看護体験
があります。

その後の人生を生きていく糧となるような、忘れられない
言葉をもらうこともあります。

看護は、人生を変えることだってあるのです。

看護にまつわる感動のエピソードが、生きる素晴らしさを
思い、明日を生きていく力を生み出すきっかけになれば幸い
です。

公益社団法人 日本看護協会

目次

【看護職部門】

【最優秀賞】

白いカーテン …… 3

【内館牧子賞】

白衣を脱ぐ日に …… 4

【優秀賞】

心を取り戻した瞬間 …… 5

四三の新米看護師 …… 6

涙で濡れた枕 …… 7

【入選】

最初で最後の1枚 …… 8

そばにいたいだもん …… 9

大切なものさしをいただいた涙 …… 10

七色（なないろ）の手 …… 11

コンビニ蜚 …… 12

【一般部門】

【最優秀賞】

光が差した瞬間 …… 13

【内館牧子賞】

全身がふるえた …… 14

【優秀賞】

やさしい眼差しと心配り …… 15

母を呼び戻した看護の力 …… 16

手 …… 17

【入選】

走りつづけて …… 18

訪看さん …… 19

湯たんぽ …… 20

一瞬の花見 …… 21

夢の中の温泉 …… 22

感動をいつでもあなたの手のひらに
スマホアプリ
「忘れられない看護エピソード集」

「忘れられない看護エピソード」の
歴代の優秀作品を、手軽にいつ
でも楽しめるスマートフォンのアプリ
が登場しました。心がじんわりと
温まる話や思わず笑みがこぼれる
話、涙なしには読めない話など、
よりすぐりのエピソードをぜひお楽
しみください。

■収録作品：第1～3回の看護職部門
／一般部門の最優秀賞、内館牧子
賞、優秀賞、入選の合計62作品

■価格：無料

■ダウンロード：
<http://www.nurse.or.jp/smt/>





白いカーテン

【小野寺 真理・岩手県】

24年前の話だが、小児科病棟のナースステーションの窓に掛けられて

いる白いカーテン、その隙間に新人看護師の私は一喜一憂していた。左側が少し閉められている時は、重症の患児がいる。廊下から心電図モニターが見えないように隠されるのだ。右側が少し閉められている時は、年長の先輩が夜勤をしている。カウンターの右端に腰かけ、ちよつと休憩するためだ。半分だけ閉められている日は、食いしん坊の先輩が夜勤をしている。死角を作りカップラーメンを作るからだ。しかも、ミルク用ポットのお湯を使っていた。「内緒だよ」と言つて、ポットを押す先輩の手がむちむちしていた。

あの日、日勤だった私は憂鬱な気持ちで出勤した。予感があたった。左側のカーテンが閉められていた。「えりちゃんだ」とつい口走り、モニターの前に駆け付けた。隣の個室から「キヤー」と叫び声が聞こえ、同時に心電図の

波形が1本の線になった。「えりー、えりー」とママの絶叫が響き続けた。

その時、背後で「ザーツ」と強い音がした。振り向くと、師長がカーテンを一気に閉めていた。そして、「5分だけ、泣きましよう」とすでに泣きながら言った。身長180センチ以上もある大男の先生が、大きな手で顔を覆つて肩を震わせていた。師長は、胸ポケットに綺麗に畳んでいたピンクのハンカチを取り出し、涙を拭いていた。ハンカチがない先輩たちは、ぼろぼろ流れる涙を自分の指で拭いていた。5分たったのか、もつと長かつたような気もしたが、今度は静かに「サーツ」とカーテンが開けられた。

途端に、いつものきびきびとした申し送りが始まつた、何事もなかつたように。まだうるうるしていた私の肩に、「これがプロというもののなんだよ」とむちむちした先輩の手が置かれた。



白衣を脱ぐ日に

【八木 房子・愛媛県】

白衣に袖を通す。心の中で何かが静かにざわめいている。今日が看護師最後の日。

見慣れた病室、ナースステーション、目に入る一つ一つが真新しく映る。明日から見ることはないこの光景。私は35年間、数え切れない患者に出会い、数え切れない死を見つめてきた。「看護」というものに少しでも近づくことができたのだろうか。白衣を脱ぐその日になって、自分が歩いた看護の色がぼんやりと浮かぶ。皮肉なものだ。白衣に包まれていた時に見ようとしなかつた色を思い浮かべるなんて。

一步一步、廊下を歩く。ふと立ち止まつた病室の前に、車いすの彼女がほほ笑んでいる。彼女は末期がんの若い患者だつた。激痛と吐き気が彼女を容赦なく襲つていた。私にできることは、指示された鎮痛剤を投与することだつた。ある日のこと、口数の少ない彼女が、「看護師さん、私、座りたい」。

氷のような目で私に訴えた。心が震えた。どうしても彼女を車いすに乗

せたい、という気持ちが揺るぎないものになった。必死の説得で医師から許可をもらつた。なぜ、私はこんな思いになつたのか。それは、看護師として何もできないつらさと、もしかして、がんになるのは彼女ではなく私だつたのかもしれない、という人生の宿命を感じたからだ。

彼女を車いすに乗せた。力のない手を顔まで上げ、ピースしてほほ笑んでくれた。彼女の目にかげろろのような光を見た。希望を失いかけた時でも、人は時としてほほ笑むことができるのだ。うれしかった。目が潤んだ。つらかつた。悲しかった。彼女は2日後、静かに目を閉じた。

私が白衣を脱ぐ日に、30年前に逝つた彼女が、あの時のほほ笑みで見送つてくれた。

彼女が私の中に残っていたのは、死ではなく確かな看護だと私は信じていた。

ああ、私、看護師だつたんだ。



心を取り戻した瞬間

【おがわ まき
小川 真紀・宮城県】

震災から1年近かったあの日、私は初めて心から泣いた。仙台で被災し、役所で訪問助産師として働く私は、沿岸部に派遣されることはなかったが、続々と届く悲惨な報告に心がまひした。

命を落とした人、その家族、何千もの人々の叫びが聞こえるようだったが、その声に反応する心を失っていた。とにかく目の前にある仕事を無心でこなし、気が付くと震災から1年近くがたっていた。

そのころ、新生児訪問で、あるお宅を訪問した。そのお宅では、2歳8カ月の長女を津波で亡くしていたので、言動には注意を払わなければと私は緊張していた。

チャイムを押すと、お母さんが笑顔でドアを開けてくれた。中にはテーブルに芋ようかんとお茶が準備され、赤ちゃんは和室ですやすやと寝ていた。

そして一番明るい居間に新しい仏壇があり、幼い女の子の写真が何枚も置かれ、その周りに好きだったであろう玩具、お菓子がたくさん置いてあった。私が「お線香を一本あげさせてく

ださい」と言うと、にこやかにお母さんは「お願いします」と答えた。お線香に火をつける私の手が震えた。手を合わせるついに涙があふれた。止めようとしても止まらない。「すみません」。

謝る私にお母さんも泣き出した。それから言葉なく2人でしばらく泣いた。その後もお互い泣いては謝り、笑っては泣いた。

あの日、たまたま祖母の家に長女を預け買い物に出ていて、それきり祖母にも長女にも生きて会うことはなかったと話してくれた。

「絶望の中で、新しい命が生まれたことが何よりの救い、この子にはお姉ちゃんがいつもそばにいます」と、お母さんは言った。会話の中でその言葉にたどり着いたようだった。

私はこの日、看護することで自分自身がケアされることを学んだ。私に泣き方を思い出させてくれたのは、亡くなったお子さん、傷ついたお母さん、そして健やかな赤ちゃんの存在だった。看護は一方的なものではないことを私に教えてくれた経験であった。



四三の新米看護師

【みいだ しんじ
三井田 信二・広島県】

初めて、入院患者さんの担当になった時のことが、今も一番印象に残っている。私は看護師ではあるけれど、人とは少し違う。男性であることは、今はそう珍しいことではない。だけど43歳の新米看護師。年齢的にも立派なおっさんだし、実際に見た目もおっさんだ。

当然、滑稽だし、異様でもある。はつきり言つて印象は悪い。

入院される患者さんは50代男性だった。きっと女性の看護師に、お世話されることを望んでいただろう。私が患者さんの立場でも、そう思うのだから仕方ない。「なんじゃ、あんた看護師なんかい」。それが最初にぶつけられる言葉。

「女の子がええし、せめて若い方がええわ」。苦笑いを浮かべながらも、心情は穏やかじゃなかった。

だけどそんなことは覚悟の上で、この職に就いた。これは仕事だ。私ができることをやらなければならないし、スキルアップのためにも経験を積まなければならない。私は献身的に努めた。看護師はただ仕事をこなすだけではない

ない。患者さんは病氣と向き合っているのだから、常に不安を抱えている。少しでも心の支えになりたい。それでこそ私がこの仕事についた意味がある。

その努力の甲斐があつてか、無愛想だった患者さんも少しずつ心を開いてくれた。料亭に勤めているそうだ。私も看護師の前は中華の料理人だったので、話が合つて盛り上がった。

退院する日、どうして看護師になったのか尋ねられた。「生まれてきた娘が、体が不自由だったんです。目も見えないし、耳も聞こえないし、話すこともできないし、一生歩くこともできません。でも育てると決めた以上、私がやれることは全てやりたいんです」。

患者さんは少し涙ぐんでこう言った。「そんな事情があつたことも知らんで、ひどいこと言つてすまんかった。今度、娘さん連れて、うちの料亭に來い。うまいもんごちそうしたる」。おっさんが泣くのはみつともなかったけど、どうにも涙が止まらなくて、困った。



涙で濡れた枕

【菅中沙都姫・福岡県】

「綾田さん宛てに手紙が届いてるよ!」。夜勤明け、事務員から手渡された細長く白い封筒には、1枚の写真と1枚の便箋が入っていました。私は写真を見た瞬間、急に胸と目頭が熱くなったのを覚えています。その写真には、高校の卒業証書を手にした青年が最高の笑顔で写っていました。

私とその青年と出会ったのは約1年前、当時勤めていた整形外科の病院でした。そこへ救急車で運ばれてきたのが、まだ高校2年生の彼だったのです。整形外科に救急車が入ることは滅多になく、私は同僚たちと「何ごと?」と、処置室に運ばれてきた彼を見ました。ベッドの上には、紺色のブレザーにチェックのズボンを着た彼が横たわっていました。ただ、チェックのズボンは激しく破れ、その隙間からは息を飲むほど損傷の激しい足が見えていたのです。交通事故でした。

彼の緊急手術は7時間程度で終わり、その数週間後から義足生活が始まったのです。まだ高校2年生の彼に

はつらすぎる現実なのに、彼は毎日面会に来る両親や友人、私たち看護師にも笑顔でした。しかし、一度だけ本心を見せてくれました。

その日、私は彼の部屋担当で、血圧を測り、他愛もない会話をし、最後に「何かありましたらコールを押してください!」、そう言って退出しようとしたら「…足を下さい」と小さな声で言ったのです。振り向くと、彼は枕に顔を押し付け、必死で声を殺しながら泣いていました。泣きたくて、泣きたくて、ずっと我慢していたのだと知り、私も涙が止まらず声を殺して泣きました。そして、「泣きたい時は泣いて良いんだよ、我慢しなくて良いんだよ」と小さく言いました。すると彼は大きな声で泣きだし、涙で枕はびしょ濡れでした。

便箋には「無事卒業しました。義足にもだいぶん慣れ、俺は元気です!!」と。大きな文字で書かれていました。



最初で最後の1枚

【鳥海洋一・神奈川県】

タンザニアの病院で看護師として支援活動をしていた時のことです。小児がんセンターができたとき、見に行きました。すると、子どもたちが「遊ば!」と寄ってきました。その時、私の白衣を引っ張る少年がいました。少年は声を掛けても、じっと私を見つめ何も言いませんでした。

ある日のこと、カメラを持っている私を見つけ「写真撮って!」と、子どもたちが集まってきました。写真を撮っていると、またあの少年が私の白衣を引っ張っていました。「君も撮る?」と聞くと、少年は黙ってうなずきました。「また、黙っている…」と私は少年のことが気になり始めました。

数日後、子どもたちが「写真まだ?」と私のそばにやってきました。「忘れてた!」。慌てて現像し、写真を届けにいくと、みんなすごく喜び、写真を持って帰りました。しかし、1枚だけ写真が残っていました。私を見つめ白衣を黙って引っ張っていたあの少年の写真です。私は同僚の看護師に尋ねました。する

と、昨日亡くなったことを教えてくれました。私はあまりの衝撃に言葉がありませんでした。「渡らなかった…」と看護師に写真を見せると、「あそこはまだ、その子のおじいさんがいるよ!」と教えてくれました。

急いでおじいさんの元に行き、写真を渡し、「遅くなってごめんなさい。写真、渡しなかったんですけど…」と伝えました。気付くと涙があふれていました。「あの子はもう神様の所にいるから大丈夫。泣かないで。あの子は生まれてから1枚も写真を撮ったことがなかったから、きつとすごく喜んでいると思うよ。本当にありがとう!」とおじいさんは言いました。

「あと1日早く来れば少年に直接写真を渡せたのに…」と後悔で胸が苦しくなりました。しかし、写真を渡せたことで、おじいさんはいつでも少年の顔を見られる。そう思うと、少年にとって最初で最後の1枚の写真を撮れたことを、今は後悔ではなく光栄に思います。



そばにいたいんだもん

【ふかつ深津 より子・こ神奈川県】

あれから30年もたつてしまいました。ふとした瞬間にその光景が昨日のことのように鮮やかによみがえります。小児病棟の実習で受け持った5歳の女の子との出会いです。女の子は再生不良性貧血で長い間、入院生活を強いられ自由に走り回ることもできずにいました。看護学生の私は何とか女の子に受け入れてもらおうと看護計画を立てていくのですが、うまくいきません。いつも一人、なかなか心を開いてはくれないのです。

お母さんも「この子難しいでしょ」と苦笑い。長い入院生活で彼女は笑顔さえも少なく、自分を表に出せない子になってしまったのでしょうか。彼女が内に秘めていることを分かりたい、子どもらしく自分を表現できるお手伝いがしたいという思いが強くなりました。「私が彼女だったら何がしたいか」と思いを巡らせたとき、分かったのです。5歳の女の子にとって家族がどれほど恋しいか。だから、体を拭くときもお母さんの面会を待つと一緒に拭きまし

た。頑張つて毎日面会に来るお母さんにも励ましの言葉を掛けました。「大変ですけど、どうぞ毎日来てあげてくださいね」。

実習も最後の日、私は女の子に「お父さんにお手紙書こうか。お父さんは会いに来たいけど、お仕事を一生懸命頑張っているから、来られないんだもんね」と病棟にあったかわいい便箋と封筒を手渡しました。実習中、一度も面会には来られていないのです。

その時の彼女の丸い大きな瞳の笑顔を今も忘れることができません。彼女はお父さんの似顔絵を便箋いっぱいに描きました。そして封筒の後ろに自分の名前と並んで「お父さん」と書いたのです。私が「表にお父さんの名前書くんだよ」と教えると、「いいんだもん。お父さんも一緒に居たいんだもん」という言葉が返ってきました。私は胸が熱くなりました。いつでも相手の立場に立つて考えることの原点を伝えてくれた体験です。



大切なものをいただいた涙

【やこう みちよ矢向 美千世・神奈川県】

「あなたがやれ、やれと言うことは、僕が今までやむなく捨ててふたをしてきたものを一つ一つ引っ張り出して並べて見せられているのと同じだ」

これは訪問看護師として働き始めて2年目の私に向けられた怒りの言葉。

長年心臓を患ってこられたMさんは、当時私が担当していた利用者さんだった。幼いころから人生のさまざまな場面で悔しい思いを体験してきたとよく話してくださった。その逆境にも屈せず生き抜いてこられた姿にいつも尊敬の念を抱いていた。しかし、リハビリに対して衰えを口にされ徐々に消極的になっていく姿に、いつしか「昔のMさんは前向きだったのに。もつとやれるはず」と思うようになった。

そんな私に苦痛を感じておられたのだろう。ある日、温和なMさんが突然声を荒げ怒鳴ったのだ。私はぼろぼろとしながらも、今まで伺ってきた数々のエピソードが一気に頭の中に駆け巡った。「Mさんに昔と同じ心の痛みを味わわせていたなんて…」と思っ

今まで不快な思いをさせていたこと、その上、泣いてしまったことをひたすらわびてMさん宅を後にした。もう二度と私の訪問は許されないだろう、そう思った。

しかし、後日、「看護師さんっていうのは人のために泣くことができるんだね」という思いがけない言葉とともに訪問が許された。Mさんは「平行線でもいいじゃないですか。これからも曲げないかもしれないけれど、僕にどうやってもらうことは大事だから、声掛けはやめないでくださいよ」とおっしゃった。笑顔だった。

看護師としての思いを大切にしながらも決して自分の価値観を押し付けずに関わってほしい。それが真に相手を理解し尊重することにつながる。と気付かせてくれたのだ。Mさんが亡くなられて10年以上たつ。今も私に看護師として人と向き合う姿勢を教えてくれる、忘れられない思い出である。



七色(なないろ)の手

【田口真紀・岡山県】

外来通院のおじいちゃんと手をつないだ孫がバイバイと診療室を出る。そんな光景を目にすると、10年ほど前、がんで余命3カ月だった男性患者との思い出がよみがえる。ベッドで長女の孫を抱いて過ごす顔は、いつでもおじいちゃんスマイルだった。外泊に向けて点滴の交換方法を練習する長女は、父親が残された時間を孫たちと笑顔で過ごせることをいつも願っていた。

長女は外泊の日、個人タクシーを営んでいる父親の愛車で出迎えた。親子のやりとりから、初めて娘に愛車の運転を任せることが分かった。長女は心配気味の父親を「お客さんはお静かに」と笑いながらなだめた。私が「ゆっくりしてきてくださいね」と、手を振ると彼も手を振り、親子3人が乗った車は発進していった。

当時、彼の孫と私の娘は同じ年だった。娘の小さな手と自分の手を重ねた時の喜び、幸せ。そうだ！家族の記念に「手形」を残そう。きつといつの日

か、おじいちゃんの手の感触を懐かしく思う日が来るように……。私の思いを長女に伝えた。数日後、1泊2日の外泊から戻ってくると、彼は言った。「孫の手はちっちゃうてカワイイんじゃない」と、家族で手形をとった話を聞かせてくれた。そして、おじいちゃんの喜びに満ちた笑顔を見せてくれた。

彼が亡くなり、半年たったころに、私が娘を連れて彼の家を訪ねると、色とりどりの手形を押した画用紙が仏壇に飾ってあった。長女と孫たちの小さな手が、彼と妻の手を丸く囲み、家族の心は「七色の手」でつながっていた。娘を抱いて眺めていると、おじいちゃんスマイルで手を振る彼の姿が見えたような気がした。

10年前に出会った家族の絆から、看護するという喜びを教わった。看護学校を卒業して25年、「七色の手」は、これからもずっと、私を支え、応援し続けてくれるのではないかと思う。



コンビニ蛭

【野口由枝・熊本県】

5年前、母が倒れてから私は、夜勤専従の看護師となった。私の勤める病院には社会的入院の患者も多い。

彼女は86歳、若いころは教壇に立ち、定年後も教育の場に身を置き、彼女いわく、「バリバリのキャリアウーマン」だったらしい。そんな肩書きからは想像もつかないほど、彼女の声は穏やかで、笑顔の可愛らしい、話好きのおばあちゃんに見えた。

私は当直に入る時、病室にあいさつまわりをする。「今日当直の野口です。よろしく願います」。すると彼女はいつもこう言う。「今日は何時ころ暇になる？じゃ、10時ごろ話に行つてもいいかしら」。私はひそかに真夜中の訪問者と呼んでいた。彼女は私が詰所になくても、歩行器を押し、消灯後のぼんやりと灯りのついた詰所入口の椅子に腰を掛け、私を待ってくれていた。それから彼女はゆっくりと話し出す。

「子どもさんは幾つになった？そう、男の子？可愛いでしょ、私も何人もの子どもたちをみてきたけど男の子は優しいからいいわよ、頼りになるわよ」。

彼女は3人の息子を育てあげた母でもある。「そろそろ反抗期ね、そんな時は親も戸惑うから、ただ黙って抱きしめればいいの」が口癖で、彼女の声は、赤点ママの私に優しくかった。それから、話し疲れた彼女は病室に戻っていく。彼女は消灯後の詰所の明かりをまるでコンビニのようだと笑っていた。「知ってる？コンビニの明かりは蛭の明かりと同じ明るさなのよ、人がたくさん集まるようにね……」。

去年私は、乳がんを患い右の乳房をなくした。そして6カ月後、無事職場復帰した。「おかえり！」と言ってくれたなじみの患者さんの中に、彼女はいなかった。

今日も私は、夜勤専従として、彼女が言うコンビニ蛭をともしながら走り回っている。そして、ぼんやりと明かりのついた詰所の中、彼女との他愛のない時間を懐かしく思う。

「今、私の息子は中学2年生。あなたが教えてくれた反抗期です」



光が差した瞬間

【楠 由美・奈良県】

「この子と一緒に死のうか」。そんな思いが何度も頭をよぎるほど、当時の私は心身ともに疲れ果てていました。息子がアトピー性皮膚炎と診断されたのは生後6カ月の時。行き先も告げられず、急に暗いトンネルの中に放り込まれた気分でした。

息子は全身のかゆみから、抱っこしても昼夜を問わず泣き叫び、引っかけ傷が絶えず、身に着けるものやシーツは毎日血だらけ。寝る時は背中を何時間もさすり続け、やっと寝たと思えばかゆみでまたすぐに目を覚ます：そんな日々が3歳になるまで続きました。

顔の湿疹が目立つたため、道を歩いていると「わあ、汚い」「それうつるの?」。そんな言葉を時々掛けられることもありました。周りに同じ疾患の子はいなかったため、悩みもなかなか分かってもらえず、迷い込んだこのトンネルには出口なんてない。そう思っていました。

そんな時、転居先で初めて訪れた病院で、看護師のNさんに出会いまし

た。診察で医師と私のやり取りを見ていたNさんは、「お母さん、いっぱい病気や薬の勉強したのね。すごい」。笑顔でそう言い、「お母さんもK君も今まで頑張ってきたね」と誰も触りたがらなかった息子の手をぎゅっと握ってくださいました。

私は急に力が抜けて、気が付くと涙がぼろぼろこぼれて止まらなくなっていました。不思議そうに私の顔を見上げる息子と、驚きながらも背中を優しくさすってくださいったNさんの手のぬくもりを今でも忘れることができました。

「頑張つて」と、いつも言われてきた私にとって、「今まで頑張ってきたね」というNさんの言葉は、長いトンネルに初めて差し込んだ光でした。私たち親子の存在を認めてもらえ、救われた気がしたので。Nさんの言葉(光)を支えに、今も一進一退しながらも中学生になった息子と前に進んでいます。

私は2年前に看護学生となり、今Nさんのように誰かの力になりたいと看護師を目指しています。



全身がふるえた・・・

【伊藤 ひろゆき・熊本県】

12年間の長い闘病生活の中で、9度の入院を経験した。3度目の入院の際、当初はそれまでの疲労回復(休息)のため1カ月くらい病室や病棟内で過ごした。そして、徐々に病棟リハビリプログラムを始めた。回復のためできる限り参加し治療に取り組んだ。自分では、まだ病は「3割程度の回復」という実感があった。

しかし2カ月半たったころ、主治医に「伊藤さん、あと10日くらいで退院してください」と唐突に言われた。私は、「今、退院したら、何のために入院したのか分かりません。まだ症状は良くありません」と医師に告げた。しかし医師は机をドーンとたたき、脅すように退院を迫った。私の切なる懇願は、結局受け入れられず、早すぎる退院と、その後の生活を考え、悲嘆に暮れた。その時は、食事の味すら感じなかった。

その夜、病室で大きな不安と落胆の中しよんぼりしていると、夜勤の看護師さんが私のもとに来られた。そして、いろいろな会話した後、目線の位置までしゃがまれ、こう言われた。「今日の診察のことは、すべて日勤の看護師から聞きました。私たちが話し合いました。

結果、伊藤さんの退院は、まだ早すぎるとの結論に達しました。私たち看護師は医師の下で仕事をしていますが、看護師としてのプライドはしっかりとあります。先生を説得します。安心してください。私たち全員で伊藤さんを守ります」。

私はその看護師さんの真剣なまなざしと心の底からの言葉に接し、全身が震え上がるほど感動し、少し涙を浮かべた。何か大いなるものに包まれたような安心感を得た。そして、入院の継続が可能となり、治療に専念することができたのだ。

後に分かるが、このころ、病院での3カ月までの入院制度(急性期)が導入されたらしい。在院日数を超えると、病院の診療報酬の点数が下がるらしいのだ。それにしてもこの時の主治医の態度の変化には驚いたところではなかった。長い12年超の闘病生活の中で、数多くの医療従事者と出会った。もちろん良き医師との出会いもあったが、特に看護師さんとの感動的なエピソードは、数多くあった。その中でもこのエピソードは、私の心に深く染み込むほど強烈で、そして感動的なものであった。Kさん、ありがとうございます。



やさしい眼差しと心配り

【大澤貴子・茨城県】

年子の怪獣ちびごんたちの子育て、そのうえ3人目の子もお腹の中で暴れ回っていたころ、私は毎日へとへと。遊んでも遊び足りない子どもたちに、「もういい加減にしてよ」と最後はキレ気味。そんな時、必ず不思議とあの時の看護師さんの笑顔が浮かんでくるのだ。

私の2歳違いの妹は重度の斜頸^{しゃけい}であり、生後、何度も手術を繰り返し、母は付き添いのため家を留守にする日が多かった。退院後も、私は母に手を引かれ、妹のリハビリに黙々とついて行くという日々の連続だった。母は妹の首を治すため必死で、家業もこなしながら、いつもピリピリと気を張りつめていた。私は幼心にも、母に心配をかけてはいけないという思いが常に心の中にあり、存分に母に甘えた記憶がない。母がいなくて寂しいと母に言うこともできず、母の前で泣くこともできず、この時の切ない感情は今も心に残っている。

妹の入院中のある日のこと。父とお見舞いに行った時、上半身ギブスで固

定された妹が院内学級で友達ができたとことや、学級での出来事をうれしそうに語っていた。私の傍らにいた看護師さんが、「一緒に語ってみる？」と優しい笑顔で私に語りかけてくれた。

それまで、何もかも妹中心に回っていた生活だったが、この時私のために、私だけに掛けてくれた一言がとてもうれしく、この一言と優しい眼差しに救われた思いがした。その時、看護師さんは病児の兄弟姉妹の気持ちや私の表情から理解していたのであろう。私は、この後、院内学級を見学し、妹の置かれている大変な状況を理解したのだった。

病人やその家族にまで心を寄せ、優しい心配りのできる看護師さんに出会えたことは私にとって、その後の人生で3人の子の母となり、子育てしていく上で大きな支えとなってきた。病だけでなく、心の痛みも理解し、共感し、寄り添うという看護の原点に幼少時代に触れることができた私は幸せ者だ。



母を呼び戻した看護の力

【岩村圭南・東京都】

あまりにも突然の出来事だった。風邪をこじらせ肺炎が重症化し、母が救急車で病院に運び込まれたのである。しばらくしてICUから一般病棟の個室に移ったが、人工呼吸器と点滴でかろうじて命をつなぎとめていた。

その夜、私は少しでも母のそばにしようと病室に泊まり込んだ。暗がりの中、プシュー、プシューと機械的に繰り返される呼吸音。否が応でも伝わってくる事実―。母が無言のまま1人、死線をさまよっている。ふと人の気配を感じ、何事かと思い、ソファベッドから頭をもたげ薄目を開けた。看護師さんが懐中電灯を手になさやくように言った。

「起こしてしまいましたか。寝てください。大丈夫。私たちが見ていますから。おやすみなさい」

床に落ちそうになっている毛布を掛け直してくれていたのである。

母ばかりではなく、私たち家族への気配りも忘れず、明るい笑顔で声を掛けてくれる看護師さん。

よく眠れましたか／無理をしない

でくださいね／どんどん話しかけてください／きつと聞こえてますよ／顔色がよくなってますね。

さりげない一言と笑顔に、どれほどくじけそうな心が励まされただろう。

生と死の境界線を越え向こう側に行きかけた母を、私たちの元に呼び戻した力。それは希望を捨てず、母のそばに寄り添い声を掛け続けた家族と、病院スタッフの最後までさじを投げない看護の「力」だったのである。

退院当日、看護師さんたちが見送る中、母が座る車いすを押しエレベーターに乗り込んだ。深々と頭を下げ顔を上げると、視線の先には、あふれる笑顔と揺れる手のひら。まばゆいばかりの光を背にして並んでいる天使たちが、私たち家族を送り出しているようだった。奇跡的な回復を遂げ、満面の笑みを浮かべ両手を振る母の姿が今も心に残る。

4年後、米寿を迎えた翌年、母は泉下の人となった。眠るように穏やかな最期だった。



手

【佐々木良子・東京都】

ぐるん。ぐるん。ぐるん。大きな渦の中から飛び出すように目が覚めた。意識が戻ったのは、事故から1週間後のことだ。運転中に意識を失い、ガードレールに激突、車は原型をとどめないほどに大破した。そんな中、奇跡的に助かった私は、第4頸椎骨折、脳挫傷、肺挫傷、左股関節脱臼に左膝靭帯断裂。生きていたのが奇跡だと言われた。

事故前後の記憶は全くない。大けがはしていても、じきに歩いて退院できると思っていた。それが、歩くことはおろか、息をすることすらできない。首から下の感覚が全くないのだ。まるで手も足ももげてしまったかのようだ。意識が戻り、ICUでの時間は想像を超えるつらさだ。昼夜の区別もない。たくさんさんの管につながれ、生かされている。ただ天井だけを眺め、シュー・スコン、シュー・スコンと機械音だけが響く。

生きていて良かったのだろうか。絶望感に襲われる。呼吸が乱れればアラームが鳴る。家に帰るどころではな

い。こんな状態で帰っても迷惑になるだけ。生きた屍しかばねとは私のことだ。なぜ助かってしまったのだろう。そんな時、1人の男性看護師さんが洗面器にお湯を入れて持ってきた。「佐々木さん、手を洗いましょうね」と。手を洗う？何にも感じない手を洗ったって、思ったが気管切開で声も出ない。無口なその人は、手を洗っている間ほとんどしゃべらない。次の日も次の日もその人は私の手を洗ってくれた。せっかく洗ってくれても、何も感じない手にやるせなさで涙がこぼれた。すると、そっと涙を拭きながら、「ぼくにできることはこれくらいなので」と言った。

たくさんさんの機械につながれて、一言も話すこともできない私を、人として扱ってくれたことがうれしかった。生きることを見つ先に諦めていたことが恥ずかしかった。その人は、手を洗うことで、私の心の中の不安を少しでも洗い流そうとしてくれたのかもしれない。あなたは生きています。だから諦めないで。



走りつづけて

【安藤憲一・東京都】

父は82歳で亡くなった。肺がんの末期で、わずか1カ月という短い入院生活であったが、今も忘れることのできない光景がある。

見舞いに行った、ある日のことであった。夕暮れ近い部屋は薄暗く、ベッドに近づくとう父は眠っていた。体には、何本もの管が付けられていた。

私は口を開けて眠っている、うつすらどひげの生えた痩せた父の顔をのぞき込んだ。だが、父は人の気配に気付かないようだった。私はぼんやりとベッドの傍らに立っていた。

その時、若い看護師が、声を掛けながら入ってきた。すると、それを待っていたように父が目を覚ました。

「安藤さん、具合はどう？」

「うん、ずっと走り続けたので疲れちゃって…」

「そう、もう走らなくてもいいのよ。ゆっくり休んでね…」

彼女はそっと父の手に触れながら言った。

「はい」

父の声には、あどけなくまるで幼い子どもが、親や先生に甘えるような響きがあり、目には何かを訴えるような色が浮かんでいた。それは、私が今まで見たこともない父の姿であった。

東北の山村で、村一番と呼ばれた裕福な農家に生まれながら、幼くして実家の没落と両親の死に遭遇し、上京して働きながら夜間中学を出たという父。長じて中国に渡り、豊かに暮らしていたものの、戦後は引き揚げ者として、無一文からの出直しであった。父にとつて、その人生は文字通り、走り続けた一生だったと言って良いだろう。混濁してゆく意識の中で、父はもう一度、必死に人生を走っていたのだろうか。看護師へ甘えたように見えたのは、あるいは、はるか昔に亡くした縁薄かった両親のそれだったのかもしれない。

父が亡くなったのは、それから3日後であった。



訪看さん

【小前ひろみ・東京都】

「ほうかん」と聞いて最初に訪問看護さんが頭に浮かぶ方がどのくらいいるでしょう。私は落語などで知っている「幫間」が浮かんでしまいます。母が胃ろうを造設した時まで、その存在すら知りませんでした。ケアマネさんがケアチームに訪看さんを入れて下さっても、実際は何をやっていたのか分からないでおりました。

認知症がかなり進んだ母の胃ろうでの在宅介護が始まった時、訪看さんがしてくださる胃ろう部の手当てや、血圧などの体調把握などは想像がつく内容でしたが、「摘便」には驚きました。まだ多少言葉を話せた母が嫌がるのを聞いておられず、その場を離れてしまったほどです。でも、すぐに状況は変わってきました。

便秘症ではなかった母も腹筋が弱り、廃用症候群でお通じが出せなくなってきた、摘便は必須となりました。週1回の訪看さんでは足りず、私が見よう見まねでやるようになって、彼女たちの持つ技術のすごさをじかに感じるようになりました。しっかりと

と大腸の上の方から下ろしてきて気持ち良く出させる。そして陰部洗浄も速やかに清潔に終える(自分だと水浸しになります)。

その手腕はプロの手技そのものだと感じました。もちろん、摘便以外にも、彼女たちの経験に裏付けられた知識で、お医者さまに相談するにはささいな、でも切実な症状などに適切なアドバイスをいただきました。

病状が進むにつれ、容態が思わしくない時や吐くなどの急変時、相談に乗っていただくことが多くなりました。時間をいとわず訪問し、病状への不安と介護に疲れた家族の状況を察して、言葉を選んでアドバイスしてくれる。そういった心のケアとも言えるべきことが、彼女たちの真骨頂でした。

条件の整った病院と違って、たった1人で患者や家族に臨機応変に対応する。技術的にも精神的にも、大変なことだと思えます。彼女たちの手厚いバックアップが在宅介護の大きな味方でした。介護を終えた今、しみじみと訪問看護護さんに感謝いたします。



湯たんぽ

【牧野保子・東京都】

10年前のことである。私は人間ドックでおなかのがんが見つかって、初めての入院、初めての手術をした。がんは、

後腹膜から腸にまで浸潤していて、手術は8時間もかかった。病気の時ぐらい1人で休みたいと個室をとったが、術後は、1人でいるとかえって痛みと不安にさいなまれた。入院は、抗がん剤投与も含めて10カ月に及んだ。

担当医は毎日夕方になると立ち寄ってくれたが、彼が帰った後、私は不安が募って毎日のようにおなか痛んだ。痛み止めは決められた回数しか飲めない。ナースコールをすると、すぐ看護師が来てくれた。私の訴えを親身に聞いてくれ、「ちょっと待ってて下さいね」と病室を出て行った。当直医でも呼んで来てくれるのだろうか。

戻ってきた彼女は、手に赤いカバーにくるまれた湯たんぽを持っていた。「これをおなかに当ててみて下さい。きつと楽になります」。その湯たんぽを抱えてみると、ほんのりとしたぬくもりがおなかから全身に広がっ

て、だんだん痛みが和らぐような気がした。

「ありがとうございます。なんだか気持ちよくなってきました」。「冷めたら遠慮なく言ってください。いつでも取り替えますから」と、看護師は笑顔を残して病室から出て行った。こんな最新医療を施す病院で、まだ昔懐かしい湯たんぽが活躍しているなんて、思いもよらなかった。彼女は、深夜まで何度も私の様子を見に来てくれた。

医師は、患者の病状の変化に24時間、対応はできない。そんなとき、懸命に患者の訴えを聞き、適切にフォローしてくれるのが看護師だということを知った。私を、私は入院して初めて知った。看護師は3交代制で、朝昼夜と替わるが、どの看護師も患者の立場に立って、優しくお世話してくれた。「看護師さんは、湯たんぽと同じだ」と、私は思った。10カ月もの闘病生活を持ち切れたのも、彼女たちのおかげだと、今でも深く感謝している。



一瞬の花見

【木村光子・神奈川県】

2月23日の朝、主人が交通事故で病院に搬送されたという電話を受けました。とるものもとりのあえず病院へ。「やけどがひどく、対応できる先生がいないので」と、また、救急車で他の病院へ運ばれ、すぐに手術をすることに。

「両足切断、両手などの手術、内臓は後回し」などと説明されたのも記憶にありません。ただ署名したことだけ覚えていました。

意識が回復した時、足がなくなっただことをどう説明しようと思案しても、言葉が浮かびませんでした。先生が「私から話しましょう」と言ってくれました。

生死のはざままで1カ月余り、面会時間は1日10分程度、それでも毎日病院へ。先生や看護師さんたちには親切に良くやっていただきました。

駅から病院への道は川が流れていて、桜の花が咲き始めました。でも主人の体は身動きもできず寝たきりでした。そんなある晴れた日に、病院の通用口から1台のベッドを押しながら看護師さんが出てきました。驚いたこ

とにベッドの上に寝ているのは主人でした。その看護師さんは「お天気も良く、桜が満開なので、お花見にお誘いしました」と言って玄関を回って「きれいでしよう」と中に入って行かれました。一瞬のことでした。

歩くこともできず、手足が不自由で何も分らない主人を、春の暖かい日差しを浴びながらの花見に連れ出してくれたのです。

なんと素晴らしい、思いやりの深い看護師さんでしょう。看護師さんは主人に「生きようとする力」を無意識の中に与えてくれたのだと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

その後、手術の繰り返しと、リハビリに励みながら10カ月の病院生活でしたが、先生や看護師さんたちに助けられながら、少しずつ元氣を取り戻すことができました。

桜が咲くころになるとあの時の看護師さんを思い出します。車いすの生活ですが11年になります。残された力で前向きに生きています。

本当にありがとうございます。



夢の中の温泉

【西村美穂子・佐賀県】

7年前、父が末期の脾臓がん入院した時のことです。

入院当初は父も元気で、よく看護助手の方に自分が吹いた尺八のテープを聞かせては、「Hさん上手。また聴かせてね」と褒められ、ご満悦の様子でした。

そんな父もだんだん身体が自由が利かなくなり、自分で寝返りを打てない不満を看病している私と母にぶつけるようになりました。そして、痛み止めのモルヒネで徐々に意識が混濁するようになり。

モルヒネで眠っている父のそばに私が1人で座っていると、よく父の尺八を聴いてくださった看護助手の女性が来られました。

それまで、母の前では泣けないと気が張っていたのに、その女性の前で思わず心のたがが外れてしまいました。「こんなことなら、父に怒鳴られていた方が良かった。寝返りを打たせてあげたいけど、これじゃお父さんの意思

が分からない。何かしてあげたいのに、私は父に何にもしてあげられない」とボロボロ泣いてしまいました。

その女性は「そういうふう泣いてくれる娘さんがいるだけで、お父さんは幸せなはずよ」と一緒に泣きながら優しい言葉を掛けてくださいました。そして、「そうだー」と熱いお湯が入った洗面器を持ってこれ、タオルをお湯に浸して絞り、父の足を熱いタオルで包まれました。「こうしていると、寝ている人は温泉に入っているような気分になるの。お父さんもきっと気持ちいいって思っているはずよ。一緒にやりましょう」と2人で片足ずつ熱いタオルで包みました。

私は「やっと、してあげられることが見付かった」と救われたような気がしました。

父が亡くなる前日まで、タオル温泉は続けました。「お父さん、夢の中でいっぱい気持ち良くなってね」と願いながら。